

[アルコール依存症患者の上部消化管内視鏡検診所見の 25 年間の変遷に関する疫学研究]

a) 背景および目的

アルコール依存症の合併症では頭頸部、食道、胃のがんの頻度が高いことが知られていますが、発症には単に多量飲酒だけでなく、年齢、酒類の種類、喫煙、ピロリ菌感染による胃粘膜の萎縮、野菜くだもの摂取など多くの要因が影響しています。過去 25 年間に、久里浜医療センターのアルコール依存症患者様では、焼酎への嗜好の高まり、喫煙習慣の減少、高齢化、ピロリ菌感染者の減少が見られました。本研究は既存するカルテの情報を用いて、このような要因の経年的な変化が、がん検診の結果にどのように影響を及ぼしているかを検討します。

b) 研究対象および選定方法

1993 年—2017 年に久里浜医療センターをアルコール依存症の治療で受診し、上部消化管内視鏡検診を受けられた約 10000 例の保管されているカルテを対象とします。

c) 研究方法

カルテにファイルされた内視鏡検査の診断所見と、検査年、年齢、身長・体重、飲酒・喫煙習慣、上部消化管疾患の既往歴、貧血関連データとの関連を検討します。データは解析前に匿名化します。

この調査では、上記内容を活用させていただきますが、集計、解析の際に匿名化して情報を扱い、患者様の個人情報に厳重に保護し、患者様に不利益が生じないように配慮いたします。この調査によって得られた情報は、研究の目的以外には使用いたしません。カルテのみの調査であり、電話や手紙等で患者様に直接、情報をうかがうことはありません。

対象に該当する患者様で、この研究について疑問、または情報提供拒否のご意見がございましたら、下記の研究代表者まで、お知らせください。ご連絡がない場合には、貴重なデータとして本研究に活用させていただきます。

研究期間：2018 年 3 月 - 2019 年 2 月まで

久里浜医療センター倫理委員会：2018 年 3 月 6 日承認

研究代表者：国立病院機構久里浜医療センター 臨床研究部長 横山 顕